日本建築学会北陸支部研究報告集
第 63 号　2020 年 7 月

【7－8】

高経年団地における居住者参加型実証実験の成果と課題
– コミュニティ活動の担い手創出の視点から

正会員　○ 籔谷　祐介 *
正会員　　山田　信博 **
会員外　　林　匡宏 ***

集合住宅団地　コミュニティ　集約化
オープンスペース　社会実験　共用空間

1. 研究の背景と目的

高度経済成長期に大量の集合住宅団地が郊外部に建設された。これらの団地の集会所やオープンスペース等の共用空間は、団地コミュニティの形成に多面的に関わってきた(1)。しかし、近年では少子高齢化、コミュニティ弱体化により共用空間利活用の担い手不足が指摘されている(2)。このことはコミュニティ運営力が低下する高経年団地では、さらに深刻化すると推察される(1)。

筆者らはこれまで、集約化が計画されている UR あけぼの団地（札幌市）を対象にコミュニティ支援方策検討のためのアンケート調査や実証実験を行ってきた。

2017 年に実施したアンケート調査では、地域活動が広く開かれていないことや情報不足を理由に、参加したいができていない団地居住者が一定数存在すること、企画・運営に携わりたい団地居住者は全回答者の 1%にとどまり、共用空間活用の担い手不足を明らかにした(3)。2018 年には、開かれたコミュニティ活動のプログラム開発と担い手育成に向けて、集会所とその周辺のオープンスペースを活用した実証実験「第 1 回あけぼのテラス」を実施した(1)。その結果、普段自治会等の地域活動に参加していない居住者や団地外の人が参加するといった新たなコミュニティの場としての可能性を示唆した。一方で、専門家である筆者らが主導して実施したため、継続性には課題があった(4)。そこで、筆者らは企画段階から居住者と協働することによって、将来の担い手の創出につながると考え、2019 年 3 月から 9 月にかけて 3 回のワークショップ（以下、WS）と実証実験「第 2 回あけぼのテラス」を実施した（写真 1）。本稿ではそのプロセスを報告し、成果と課題を考察する。

2. UR あけぼの団地の概要

1960 年代に開発された RC5 階建ての集合住宅団地で、棟数が 32 棟、住宅戸数 1240 戸である。平成 27 年の国勢調査によると、人口 1471 人、高齢化率 49.4%で、空き家数は 397 戸（空き家率 32.0%）である。

3. 実証実験「第 2 回あけぼのテラス」の検討プロセス

「第 2 回あけぼのテラス」は、筆者らと団地居住者が協働で内容を検討するために、事前に 3 回の WS「第 2～4 回あけぼのまちづくり講座」を団地の集会所で実施した（表 1）。告知は各棟の階段室にある掲示板にチラシを掲示して行った。各講座の終了後には参加者を対象にアンケート調査を実施した。調査項目は表 2、表 3 の通りである。以下に各回の内容とアンケート結果を示す。

写真 1 実証実験「第 2 回あけぼのテラス」の様子

表 1 実証実験「第 2 回あけぼのテラス」の検討プロセス

名称	日時	内容	参加人数
第2回あけぼのまちづくり講座	2019年 3月23日（日） 10:00-11:30	・「第1回あけぼのテラス」の報告 ・共用空間の活用について話し合うワークショップ	17名
第3回あけぼのまちづくり講座	2019年 6月16日（日） 9:00-10:30	あけぼの団地らしい暮らしの実現に向けた実証実験プログラムのアイデア出しワークショップ	9名
第4回あけぼのまちづくり講座	2019年 7月14日（日） 9:00-10:30	実証実験のプログラム決定と役割分担について話し合うワークショップ	6名

表 2 「第 2 回あけぼのまちづくり講座」アンケート項目

アンケート項目	
属性	年代、性別
講座について	講座の参加動機、第 1 回あけぼのテラスの活動参加有無、満足度 「あけぼのテラスの報告」への気づいた点や感想（記述式） 「ワークショップ」の感想（記述式）、今後の参加意向

表 3 「第 3, 4 回あけぼのまちづくり講座」アンケート項目

アンケート項目	
属性	年代、性別
講座について	講座の参加動機、第 1・2 回あけぼのテラスの活動参加有無 地域活動への参加有無、満足度、主体性の高まりの有無 今後の参加意向、講座の感想（記述式）

3-1. 第 2 回あけぼのまちづくり講座

「第 1 回あけぼのテラス」の報告を行った後、4 グループに分かれて団地の共用空間の活用方法について話し合う WS を行った。参加者は 17 名であった。各テーブルでは、筆者らと大学院生がファシリテーターを務めた。

Results and Issues of Demonstration Program with Residents' Participation in Older Apartment Complexes - From the Perspective of Development Leader of Community Activities　YABUTANI Yusuke　et al

WS では、「気軽に集まれるサロン」、「外部の人も一緒に団地やまちのことを考える場」等のアイデアが出された。

アンケートの回答数は 17（回収率：100%）であった。図 4 の通り年齢層が非常に高かった。参加動機については、「大学の取り組みに関心があるから」が 13 名で最も多かった（図 5）。講座の満足度については、約 9 割の人が満足していた（図 6）。今後の講座への参加意向については、76.5%の人が「参加したい」と回答しており、ほとんどの人が参加に前向きであった（図 7）。

3-2. 第 3 回あけぼのまちづくり講座

あけぼの団地らしい暮らしについて考え、それの実現に向けた実証実験プログラムのアイデア出しを 3 グループに分かれて行った。参加者は 9 名で、前回から約半数に減少した。各テーブルでは、筆者らと大学院生がファシリテーターを務めた。WS では、屋外を使って多世代が集まってブランチを楽しむ「あけぼのブランチ」というあけぼの団地らしい暮らしのアイデアが生まれた。また、具体的なコンテンツとして「本」「食」「野菜」「健康」が挙げられた。

アンケートの回答数は 8（回収率：88.9%）であった。図 8 の通り、年齢層は前回同様高かった。参加動機は、「講座の内容に関心があったため」が 6 名で最も多く、続いて「団地をより良くしたいため」と「大学の取り組みに関心があるから」が 4 名であった（図 9）。普段の地域活動への参加は、25.0%が「あまり参加していない」であった。満足度は、「非常に満足」と「満足」を合わせて 62.5%であった（図 10）。主体性の高まりは、「高まった」が 87.5%であり、多くが講座を通して自ら活動しようという意志が高まった。今後の参加意向は、「参加したい」が 62.5%であった（図 11）。

3-3. 第 4 回あけぼのまちづくり講座

最初に前回の講座の振り返りを行い、その後、9 月に実施する実証実験に向けて具体的なプログラムと役割分担について話し合う WS を行った。参加者は 6 名と少なかったため、グループに分かれずに話し合った。その結果、外部の人と連携してパンや野菜等を販売し、多世代が交流するための場をつくることとなった。

アンケートの回答数は 4（回収率：66.7%）であった。年代は、70 代が 50.0%で最も多かった（図 12）。参加動機は、「大学の取り組みに関心があるから」と「他の団地住民との交流のため」が 2 名ずつで最も多かった（図 13）。普段の地域活動への参加は、25.0%が「あまり参加していない」であった。満足度は、「非常に満足」と「満足」がそれぞれ 50.0%であり、全体的に満足度は高かった（図 14）。主体性の高まりについては、「高まった」が 75.0%、「もともと非常に高い」が 25.0%であった。今後の参加意向については、全員が「参加したい」と回答した（図 15）。

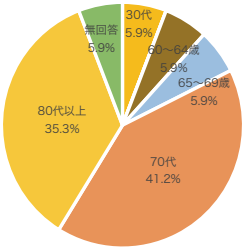

図 4 年代（第 2 回）

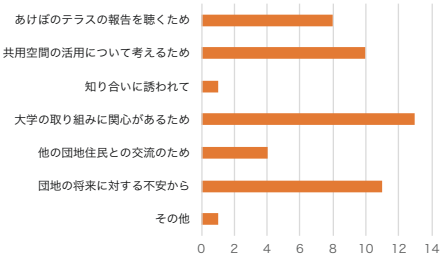

図 5 参加動機（第 2 回）

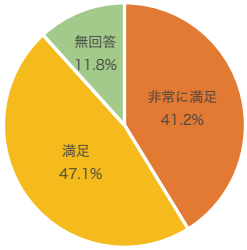

図 6 満足度（第 2 回）

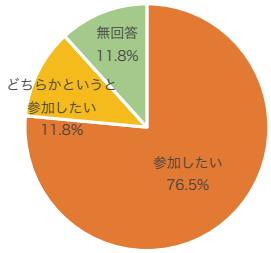

図 7 今後の参加意向（第 2 回）

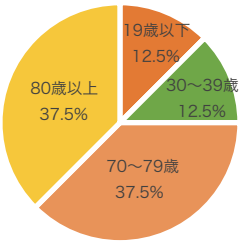

図 8 年代（第 3 回）

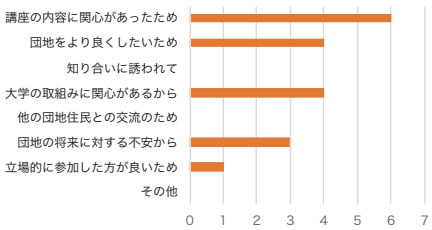

図 9 参加動機（第 3 回）

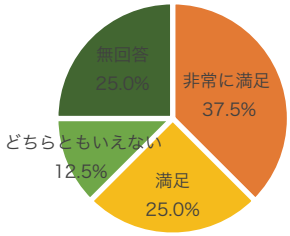

図 10 満足度（第 3 回）

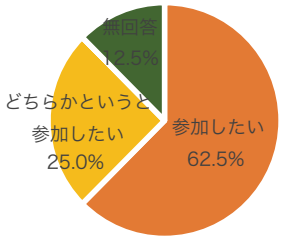

図 11 今後の参加意向（第 3 回）

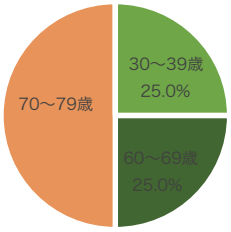

図 12 年代（第 4 回）

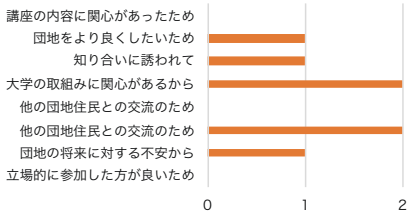

図 13 参加動機（第 4 回）

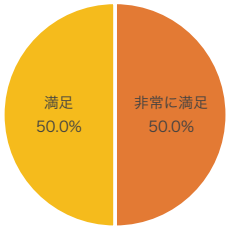

図 14 満足度（第 4 回）

図 15 今後の参加意向（第 4 回）

4. 実証実験「第 2 回あけぼのテラス」

4-1. 「第 2 回あけぼのテラス」の概要

WS の成果をもとに「あけぼのブランチ」をコンセプトとし、2019 年 9 月 14 日（土）10:00-15:00 に実証実験を実施した。場所は集会所とその周辺のオープンスペースとした。告知は団地の各棟の階段室の掲示板にチラシを掲示するとともに、団地周辺にも約 5000 部の新聞折込を行った。実施プログラムはワークショップで決定したもの（表 4）で、筆者らと団地居住者のネットワークを生かし出店者に依頼した。来場者は 156 名であった。

4-2. 企画運営協力者へのアンケート調査結果

調査項目は表 5 の通りである。回答数は 5（回収率 50%）であった。

年代は 50 代と 60 代が 40.0%、70 台が 20.0%であった（図 16）。これまでの地域活動への参加状況としては、「主なメンバーとして参加している」が 20.0%、「参加している」が 60.0%であり、普段から参加している人が多いことが分かる（図 17）。また、今後の地域活動への参加意向については、「参加したい」が 80.0%であり、今後も参加意向も高いことが分かる（図 18）。

実証実験への参加動機については、「団地をよりよくするため」4 名、「大学の取り組みに関心があったから」が 3 名であり、団地を良くしたいという気持ちが多くの人に共通している（図 19）。これまでの協力内容については、「事前打ち合わせへの参加」、「イベントの事前準備」、「イベント当日の運営」が 5 名で全員が回答している（図 20）。イベントへの評価については、「とても良かった」が 40.0%、「良かった」が 60%で、評価は高かった（図 21）。今後も企画・運営に携わりたいかについては、全員が「お手伝い程度に携わりたい」と回答しており、「主体的に携わりたい」がいなかった（図 22）。

表 4 「第 2 回あけぼのテラス」の実施プログラム

依頼担当	プログラム	運営主体	場所	参加人数（人）
団地	パン販売	うちは、ぱんや。	屋外	37
	飲食販売	高橋商店		―
	ドリンク販売	抹茶ラテSOU		45
	野菜販売	あけぼの団地有志の会		―
	風呂敷づくり	あけぼの団地自治会女性部		―
	ハーバリウム	団地居住者		9
	消しゴム	団地居住者		15
大学	カフェ	東海大学スリーカフェ		4
	パン販売	エビ工房		27
	お菓子販売	市立札幌みなみの杜高等支援学校		43
	駄菓子販売	札幌市立大学学生		―
	シェア窯	札幌市立大学学生		―
	活動展示	札幌市立大学団地サークル		―
	遊びコーナー	株式会社and&craft		―
	図書コーナー			―
	健康相談・健康チェック	札幌市立大学まちの健康応援室	集会所内	13
計				193
来場者（会場でカウント）				156

表 5 「第 2 回あけぼのテラス」のアンケート調査項目

アンケート項目	
属性	年代、性別、職業、居住年齢、家族構成
日常の活動	近隣住民との交流頻度、地域活動への参加状況 地域活動への参加意向、外出頻度
実証実験	イベントへの協力理由、活動内容、知り合う機会の有無 他の参加者と会話をする機会、イベントの評価・その理由（記述式） 今後の活動の企画運営に携わりたいか・その理由（記述式） 今後のイベント継続希望の有無、常設で運営したい企画の希望 主体性の高まりの有無、新しい発見や気づき・意識の変化の有無 イベントの感想・要望・改善点（記述式）

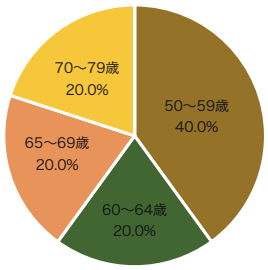

図 16 年代（実証実験）

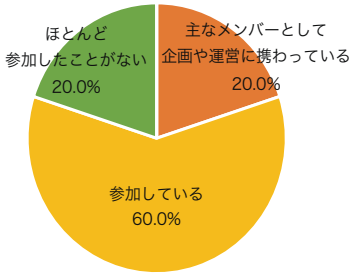

図 17 地域活動への参加状況（実証実験）

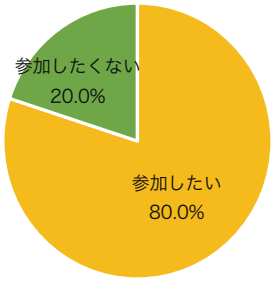

図 18 地域活動への参加意向（実証実験）

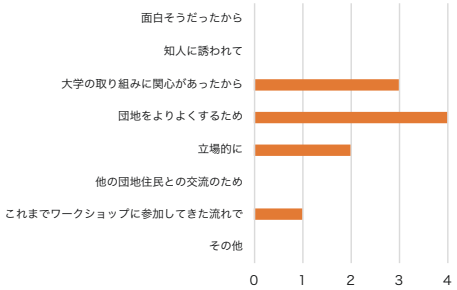

図 19 参加動機（実証実験）

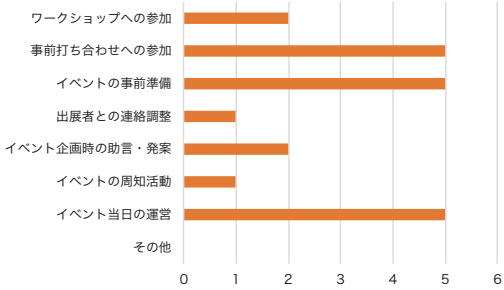

図 20 協力内容（実証実験）

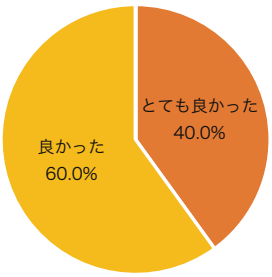

図 21 イベントの評価（実証実験）

図 22 今後の参加（実証実験）

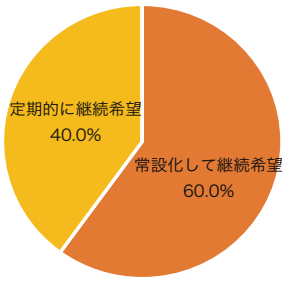

図 23 実験の継続化（実証実験）

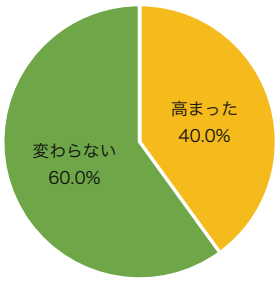

図 24 主体性（実証実験）

イベントの継続実施については、「常設化して継続希望」が 60.0%、「定期的に継続希望」が 40.0%であった（図 23）。主体性の高まりについては、「変わらない」が 60.0%、「高まった」が 40.0%であった（図 24）。

5. 団地居住者の参加者の整理

団地居住者のまちづくり講座および実証実験への参加状況を整理すると、8 つのパターンがあり、「Ⅰ.全参加型」「Ⅱ.講座参加型」「Ⅲ.講座単発+実験型」「Ⅳ.実験参加型」の 4 タイプに分けることができた（図 25）。「Ⅰ.全参加型」（2 名）は、すべての講座に参加し、実証実験の企画運営に携わった。出店者への依頼など最も貢献度が高かった居住者である。「Ⅱ.講座参加型」（13 名）は、講座のみ参加し、実証実験の運営には携わらなかった居住者で、最も多かった。「Ⅲ.講座単発+実験型」（4 名）は、講座に 1 回のみ参加し、実証実験では運営に携わった居住者である。「Ⅳ.実験参加型」（4 名）は、実証実験の運営のみに携わった居住者である。「Ⅲ.講座単発+実験型」と「Ⅳ.実験参加型」が実証実験の運営に参加したのは、「Ⅰ.全参加型」とつながりがあったためである。

6. 成果と課題の考察

6-1. 大学主導による新たな参加者の発掘

事前 WS の参加者の参加動機を見ると、毎回、「大学の取り組みに関心があるため」の回答数が多く、また普段地域活動等に参加していない人が参加していたことが分かった。このことから、大学が主導することによって新たな層の参加を促す効果があると考えられる。

6-2. 居住者の主体性の向上と役割創出

WS では居住者がアイデアを出し、筆者らはそれを整理・視覚化することで、コンセプトの構築とプログラム化を行った。また、毎回のアンケートでは、ほとんどの参加者が主体性が高まったと回答した。その結果、WS へ継続的に参加した 2 名の居住者を中心に、事前打ち合わせへの参加や、実証実験の事前準備・当日運営に 10 名が参加した。さらに、居住者のネットワークを活用し、主体的に出店者への依頼を行った。継続的に WS に参加し、コンセプトやプログラムを決めるプロセス携わることで、主体性が高まり、様々な役割を担うことにつながったと考えられる。また、ある特定の居住者が継続的に参加し、企画運営の中心的役割を担うことで、連続講座の途中で来なくなった居住者にも声がけをし、実証実験の運営協力者として参加してもらえたことは成果である。

6-3. 回を重ねるごとに参加人数が減少

あけぼのまちづくり講座は、毎回、次回への参加希望者が多かったにも関わらず、回を重ねるごとに参加人数が減少した。第 1 回目は「第 1 回あけぼのテラス」の報告会を兼ねていたため、それを聴くことを目的に参加していた人もいて、第 2 回目に以降減少した可能性も考えられる。また、第 3 回目はより具体的な内容検討であり、実際に役割分担等を決める段階であったため、負担を避けたことにより参加者数が減ったことも考えられる。今後は、継続して参加したくなるような工夫が必要であると考えられる。

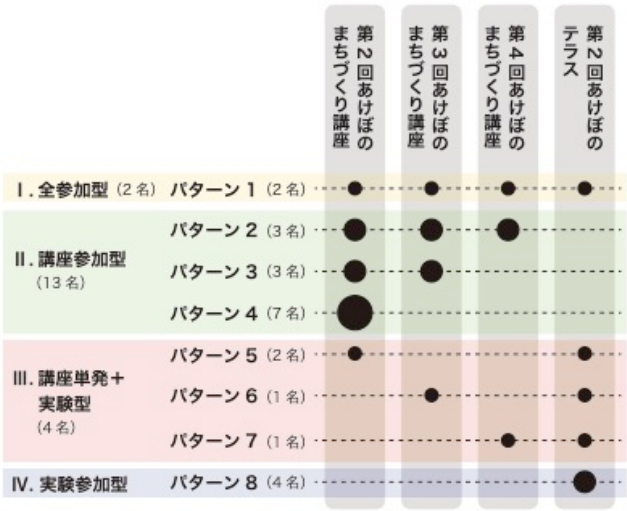

図 25 居住者の講座および実証実験への参加状況

6-4. コミュニティ活動の担い手創出の課題

実証実験後のアンケート調査では、今後主体的に携わりたいと回答した人はおらず、全員がお手伝い程度に関わりたいと回答した。最終的には、居住者がこうしたコミュニティ活動の担い手となっていく必要があるため、より主体性を高める方法を検討する必要がある。

7. まとめ

本稿では、コミュニティの担い手不足が懸念される高経年団地において、居住者参加型実証実験のプロセスを整理し、担い手創出の視点から考察した。その結果、大学が主導することで新たな参加者が発掘されたこと、居住者の主体性の向上と役割創出ができたことを成果として挙げた。また、回を重ねるごとに参加人数が減少したこと、コミュニティ活動の担い手創出まで至らなかったことが課題として挙げられた。今後は、より効果的な WS の方法を検討し、担い手創出につなげていきたい。

参考文献

(1) 籔谷祐介， 山田信博， 林匡宏：高経年団地におけるコミュニティ支援方策検討のための実証実験「あけぼのテラス」 −公的集合住宅団地の集約化手法に関する研究 その 3, 日本建築学会学術講演梗概集, pp. 1231-1232， 2019

(2) 佐土原洋平， 他：公営住宅行政における住民自主管理とコミュニティ活動の支援施策に関する調査研究， 日本建築学会計画系論文集, 第 81 巻, 第 723 号, pp. 1185-1194, 2016

(3) 籔谷祐介, 山田信博：高経年団地における居住者の地域活動への参加特性, 公的集合住宅団地の集約化手法に関する研究 その 2， 日本建築学会学術講演梗概集， pp. 1381-1382， 2018

(4) 山田信博， 籔谷祐介， 林匡宏：高経年団地のコミュニティ支援を目的とした実証実験の評価と考察 −公的集合住宅団地の集約化手法に関する研究 その 4， 日本建築学会学術講演梗概集， pp. 1233-1234， 2019

* 富山大学 芸術文化学部・博士（デザイン学） Faculty of Art and Design, University of Toyama, Doctor of Design

** 札幌市立大学 デザイン学部・博士（学術） School of Design, Sapporo City University, ph.D.

*** commons fun・博士（デザイン学） commons fun, Doctor of Design